

職業リハビリテーションにおける精神障害者に対する自己理解の支援に関する研究：実践現場における支援行動の明確化

| | |
|--------|---|
| 著者 | 前原 和明 |
| 発行年 | 2020 |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba) |
| 学位授与年度 | 2019 |
| 報告番号 | 12102甲第9516号 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00160829 |

| | | | |
|---------|---|-------------|-------|
| 氏名 | 前原 和明 | | |
| 学位の種類 | 博士 (リハビリテーション科学) | | |
| 学位記番号 | 博甲第 | 9516 | 号 |
| 学位授与年月 | 令和2年3月25日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 職業リハビリテーションにおける精神障害者に対する 自己理解の支援に関する研究 －実践現場における支援行動の明確化－ | | |
| 主査 | 八重田 淳 | 生涯発達科学専攻 | 准教授 |
| 副査 | 小澤 温 | 生涯発達科学専攻 | 教授 |
| 副査 | 佐島 毅 | 生涯発達科学専攻 | 准教授 |
| 副査 | 石原 まほろ | 職業能力開発総合大学校 | 特任准教授 |

論文の内容の要旨

前原和明氏の学位論文は、職業リハビリテーション（以下、職リハ）における「自己理解の支援」の技法を専門職の支援行動レベルで明らかにしたものであり、その要旨は以下のとおりである。

精神障害者の社会心理的リハビリテーション領域で1970年代から米国で提唱されてきた極めて重要な概念として、職リハの高度専門職である公認リハビリテーションカウンセラーの間でも認識されているところである。しかしながら、実際の就労支援における自己理解支援の技法については、未だ明らかにされていない。本研究は、この現状を踏まえ、以下の5つの研究により我が国における精神障害者の職リハにおける自己理解支援の現状と課題を多角的に探ったものである。

まず第1研究では、著者は「自己理解の支援」に対して職リハの支援者が抱える困難感と対処行動を面接調査により確認している。その結果、困難感としては「職場内支援の限界に対する戸惑い」「支援の行き詰まりによる困惑」「関係性を崩したことによる動揺」「心情に共感する中での苦しみ」「自らの支援スキルについての悩み」があり、それらへの対処行動としては「相手の気持ちに入り込んで理解する」「個人の成長可能性を信じる」「支援者自身の主観的な理解から距離をとる」「支援者としての立ち位置を心がける」「自らの立ち位置から選択した支援をする」等があることを明らかにした。これを踏まえ、第2研究で著者は、自己理解の支援が職リハの実践現場において具体的にどのような実施されているかを事例研究により探っている。その結果、統合失調症者本人の就労への自己理解と実際の職務遂行レベルとのギャップを踏まえた支援方法として、模擬的就労場面を活用し実際の職場に近い環境を用いたフィードバックによる実践が特徴的であることを明らかにした。さらに第3研究で著者は、職リハの支援現場において支援者が実際に用いている自己理解の概念を明らかにするため、Rodgersによる概念分析を行っている。その結果、自己理解の先行要件としては、「どのような場合に支援者は、自己理解を促進するための支援を実施しているのか」という障害理解の困難さや機会の不足があり、その属性としては「実施された自己理解の支援はどのような行動か」という現状認識と整理や知識の獲得と支援の工夫があることを認め、さらに帰結としては「どのような成果を目指して自己理解の支援が実施されるか」という生活上の変化や就業および個人内変化を認め、自己理解の概念が総合的に整理されている。次に、これらの結果を踏まえた第4研究で著者は、職リハにおける自己理解の支援の構成概念を行動レベルで明らかにするために、職リハ支援機関である地域障害者職業センター52所と障害者就業・生活支援センター329所に所属する就労支援者へのメール調査及び各所5名へのインタビュー調査を実施した。その結果、探

索的因子分析により、「現状認識の促進」「実体験の提供」「現状整理の依頼」「情報収集機会の設定」を統合失調症・気分障害の自己理解支援行動として整理した。さらに、同研究で著者は支援実施に影響を与える要因として、就労支援業務に携わった年数及び専門職の所持資格の影響の強さを重回帰分析により明らかにした。さらに各所 5 名へのインタビュー調査を実施した結果、著者は統合失調症については「体験を通じた確認や気づき」、気分障害では「体験からマネジメントに繋げる」という関わりの視点の違いを明らかにした。本論文の最終研究として第 5 研究で著者は、実施された自己理解の支援が対象者にとって実際にはどのような意味を持つのかについて、当事者 6 名を対象とした面接調査を行なった。その結果、特に精神障害者は自己理解を「自らの現状理解」「自信の再獲得と挑戦」「対処法の確立」「視野の広がり」として捉えていること等を明らかにした。

本博士論文で著者は、職リハにおける「自己理解の支援」が重視されている一方で、概念として未整理な状況に留まっているという状況を踏まえ、職リハにおける自己理解支援の現状と課題を上記 5 つの研究により探った。本研究は、精神障害者の自己理解の支援現状と課題を「職リハにおける自己理解の支援内容」「自己理解の支援の実施を促進する要因」「支援対象者における自己理解の支援の意味」の 3 点から混合研究デザインにより多角的に把握したものである。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、精神障害者の職業リハビリテーション支援の要の一つと言える自己理解支援を、専門職の行動レベルで定量化・定性化することを試みた最初の研究として評価される。従来まで、精神障害者の職業リハビリテーション研究領域においては、専門職と支援者による自己理解の支援行動は、実践知として過去40年以上に渡り集約されてこなかったという現状がある。本研究は、自己理解支援技法の体系化を行なった最初の職業リハビリテーション研究であり、学術的新奇性も高い。本研究により、自己理解支援の効果研究を実施するための基礎データが得られたことになる。これは、今後特に科学的エビデンスが求められている職業リハビリテーション領域で活用されるべきものであり、学術的意義と実践的・社会的意義のある研究として評価できる。特に、精神障害のある当事者自身が自己理解支援を受けることに対する心理的側面にも視点を当てた総合的な研究は見当たらず、精神障害者の職業リハビリテーション研究のみならず、精神障害者の社会心理的研究における新たな知見としても高く評価できる内容である。

2020年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（リハビリテーション科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。